第８回　糸の切れた凧

Ｉ Ｔ生

最近、高層のケア付き住宅の建設が目立つ。そこでの高齢者の生活がどうもイメージできないのだが、どんどん建設が進んでいる。

年々高層化する住宅。住民の高齢化、独居化も進んでいる

人は、高齢化が進むと、過去の記憶を語り自己の再確認をすることでストレスを和らげるといわれる。過日、香川県高松市の助産所で聞いた話だが、自分の子供も判別できない認知症の高齢者に赤ちゃんを抱かせると、自分が出産した時の体験談とその後の育児の苦労話を詳細に語り、家族を驚かせるという。現在の高齢者が育った子供のころの環境は、現在よりはるかに自然豊かであっただろう。しかし、そんな記憶の風景のカケラもない都会の高層住宅で生活せざるを得ないとなると、人の意識は「糸の切れた凧」のようになるようだ。高層マンションに住む高齢者と話すと、「便利だからここを離れたくない」という思いと「一人暮らしがこれほどさみしいものとは思わなかった」という、全く相反する思いが交錯する。そんな彼らのもとへ、たまに「慰問団」（もしくはボランティア）がくるが、その場限りのいくばくかの刺激が期待できるかどうかといったところである。

長野や徳島で、高齢者が死ぬまで農作業にいそしみ、元気に最期を迎える「ピンピンコロリ」の世界とは、あまりにも遠い話である。農作業は 365 日、２４時間の自然の変化と一体のものである。それほど変化に富む生活をしているとボケようがないのだろう。

解剖学者の養老孟司さんは、昆虫採集を日課とし野山を駆け巡っているそうである。採集した昆虫を調べるのに何日もかかるという。自然の一部としての人間として自然に向き合い感覚を磨くことで、「生

きる喜び」を味わう。変化の少ない都会の生活だけでは、そうした効果は期待できないのだと警鐘をならす。

里山や海辺で生まれ育ち、成人したいっときを町で生活したとしても、また自然豊かなふるさとへ帰り、畑を耕し、子供たちの教育にいそしむ。まさに唱歌「ふるさと」の世界である。そうしたライフサイクルの中でこそ、医療や介護はそれを補完するものとして考えるべきものだろう。「健康的な生活」とは、医療や介護の技術で担保されるものではない。また、ふだんの生活の意識のなかに自然があると、災害にも敏感になるものだ。

寺田寅彦師いわく―　「災難を予知したり、あるいはいつ災難が来てもいいように防備の出来ているような種類の人間だけが災難を生き残り、そういう「ノア」の子孫だけが繁殖すれば知恵の動物として災難は優良種を選択する試験のメンタルテストであるかもしれない」　わが身の近い将来を思わざるをえないのである。

（平成 27 年 11 月）